

来週の金曜日6月10日は「時の記念日」ですね。

今の私たちはテレビやラジオ、電波時計、携帯電話などから、日本のどこにいても正確な時刻を知ることができます。しかし想像してみてください。そういったものがなかった時代、人々は正確な時刻をどうやって共有したのでしょうか？

大正9年（1920）、東京天文台（現国立天文台）と文部省外郭団体の生活改善同盟会により、時間を守り欧米並みに生活の改善・合理化を図るという主旨で「時の記念日」が制定されました。

それにあたり、青森県は各市町村と県立学校に向け、記念講話や新聞雑誌に記事を依頼するなどの普及活動の実施や、6月10日の正午に神社・寺院・教会の鐘または工場の汽笛を鳴らして各自の時計を正確に合わせることを通達しました。

それでも一朝一夕には定着せず、青森市では同年秋に再度「時の宣伝」を実施しています。10月1日からの5日間、午前8時に青森測候所で花火を打ち上げ、これを合図に各工場・寺院は汽笛や鐘を鳴らし、市民は家の時計をそれに合わせることにしました。さらに市内を6区に分けて小学校単位で分担し、教員たちで組織された宣伝委員が担当地域の時計や通行人の懐中時計などが合っているか確かめました。また、時の宣伝のビラを各小学校で児童に配布しました。

しかし、やはり日常的に時を告げるものがなければ皆が正確な時刻を知ることにはできません。

実は青森には、この少し前まで人々に時を告げていたものがありました。それは蓮華寺の鐘です。



現在の蓮華寺

宝暦7年（1757年）、蓮華寺は時鐘をつくことを願い出て許可されました。それは青森が弘前城下に次ぐ大きな町でありながら時計がない。諸国の船が入り旅客も多いので、人々に時刻を知らせ、またいろいろな用心のためにも鐘が必要だとの理由でした。

この蓮華寺の鐘は、江戸時代末期に書かれた『御国巡^{おくにじゅんらん}覧滑稽嘘^{こっけいうそ}盡^{つきげ}戯』という庶民が津軽領内をまわる旅行小説にも登場し、主人公の2人が鐘楼堂に登って市中の眺めを楽しむ場面があります。当時もよく知られた鐘だったのでしょう。

しかし、この鐘は明治24、25年頃に時計の普及によって鳴らされなくなり、明治43年（1910）の青森大火で残念ながら鐘楼堂も失われてしまいました。

そこで、時の記念日制定の翌年、2人の市民の寄附により現在のセントラルパーク南側付近に午砲台（ドン山）がつくられ、大正10年11月1日からは正午の「ドーン！」という空砲の音で人々は正確な時刻を共有できるようになりました（午砲台については、『あおもり歴史トリビア』第26号〈2012年9月28日配信〉をご覧ください。）



午砲台公園（桂木2丁目）に設置された午砲のレプリカ